

# 大正・昭和初期の茨城におけるホリスティックな キリスト教宣教

——久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムを中心に——

小幡 幸和・熊崎伸一郎

## 1. はじめに：戦前の日本プロテスタント・キリスト教史と久慈ヴァレー・エヴァンジェリズム

1922（大正11）年から1941年（太平洋戦争前）にかけて、茨城県県北から福島県南部地域の農村に米国人宣教師5名とその家族が移り住んでキリスト教宣教活動に従事した。19世紀の米国に起こされたプロテスタント刷新運動の一つである「ストーン＝キャンベル運動」<sup>1</sup>を起源とする「キリストの教会」から遣わされたこれらの宣教師が住んだのは、久慈川沿いの茨城県那珂郡塩田村長沢（現・常陸大宮市）、那珂郡大宮町（現・常陸大宮市）、久慈郡太田町（現・常陸太田市）、久慈郡大子町、さらに福島県東白川郡棚倉町であった。これらの宣教師たちは、互いに協力しながらも各地にあって別個の教会を設立しつつ進めたこの試みを、「久慈ヴァレー・エヴァンジェリズム（Kuji Valley Evangelism, 久慈川沿い伝道）」と呼んだ<sup>2</sup>。太平洋戦争によって途切れたこともあり、キリスト教宣教の成果を数量的に勘案する視点からすれば決して大きな成果を残したとは言えないのが久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムであったが、戦前の茨城県農村部にあって米国人が多様な活動をしたことに加え、このキリスト教宣教の試みが戦後に設立され、認定こども園から大学院までを含む総合学園に発展している茨城キリスト教学園発足の遠因になったとされている<sup>3</sup>。

久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムを研究の対象とすることは、いくつかの点で日本キリスト教史研究の隙間を埋めることに役立つと思われる。第一に、十分に研究されているとはいえない日本の農村地方、とりわけ戦前の茨城県におけるキリスト教発展を解明する一端になる点があげられる。また、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの活動に含まれる直接的なキリスト教伝道以外の諸活動は、キリスト教の日本における浸透を社会的な側面から分析する際の題材を提供し得る点がある。さらには、脱西洋中心主義の視点を取り入れることが多くなり多角化する現代宣教史学にとっても、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの活動の多様さや戦前日本の農村社会における日米文化交流の要素が有益なデータを提供すると思われる。

日本プロテスタント・キリスト教史研究において地方に着目することは、これまでもしばしばなされてきた。例えば、大瀧哲也は、1979年に著した『明治キリスト教会史の研究』において群馬県、滋賀県、北海道に焦点を合わせている<sup>4</sup>。このうち、群馬県では養蚕が

盛んな地方小都市における安中教会（現・日本キリスト教団安中教会）のキリスト教受容に着目した。新島襄の伝道に端を発し、日本人の手により創設されたプロテスタント教会としては日本最古とも言える安中教会は、養蚕業を始めとする地域社会との関連や新島・同志社との結びつき、さらには非戦の思想を貫いた柏木義円（1860-1938）への高い関心もあり多くの研究がなされてきた<sup>5</sup>。ただし、地方におけるキリスト教史で安中教会ほど集中的に研究されているのは例外的と言える。

茨城県におけるプロテスタント・キリスト教受容の歴史は、本格的な研究が進んでいるとは言いがたい。『キリスト教歴史大事典』の茨城県に関する記述によれば、利根川を挟んだ千葉県側にあった安喰教会による茨城への出張伝道が茨城県における最初のプロテスタント伝道であった。また、1889（明治22）年の水戸線開通により、同年に水戸講義所、翌年に現在の日本キリスト教団水戸教会が形成された可能性がある他、資料で確認できるところでは1899（明治32）年に水戸に設立された聖公会の水戸聖ステパノ教会がある同事典は記している<sup>6</sup>。一方、「いはらき新聞」（現・茨城新聞）の記事を辿った「茨城の近代を考える会」のまとめによれば、1887（明治20）年に水戸浸礼教会（バプテスト教会）が創立されたのが水戸におけるプロテスタント布教の先鞭であり、続けて1888（明治21）年から、基督友会（フレンド派）の水戸伝道、1891（明治24）年以降には日本基督教会の講義所が水戸市荒木町に開かれ、この講義所において水戸基督青年会が会場として用いられたとされている<sup>7</sup>。東京や横浜における明治以降のプロテスタント宣教に多く見られた傾向と同様に、茨城において多くの教派が行った宣教の主流は、県都・水戸を中心とした都市型の宣教活動を行うことであった。また、他の地域同様、明治期においては水戸にあった茨城師範学校（現・茨城大学教育学部）や旧制水戸中学校（現・茨城県立水戸第一高等学校）などの学校における英語教育に外国人キリスト教徒（宣教師）が関わっていることも推察される。

なお、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの教派的母体である「キリストの教会」派と同様に米国のストーン＝キャンベル運動を起源に持つ「基督教会（ディサイプルス派）」の茨城伝道は、秋田にいた米国人宣教師チャールズ・ガルスト<sup>8</sup>が1898（明治31）年3月に水戸と太田町を訪ね、太田町で15名に洗礼を授けたことに始まる。その後、太田町では信徒の家等で定期的な礼拝が1923（大正12）年4月頃まで続けられた<sup>9</sup>。水戸では1908（明治41）年に教会が設立され、その四年後のディサイプルス派ミッション報告に「東京付近の伝道所中最も有望なのは水戸である。四年前に開設されたに過ぎないにもかかわらず、それより何年も早くに開設されたところよりも会員は多い」と記された程であった<sup>10</sup>。

日本キリスト教史を社会史として記述することも試みられてきた。先述の大濱哲也は、安中教会の分析に際して近隣で盛んであった養蚕・製糸業の影響や付近で有力であった仏教宗派の社会的影響に着目している。明治後期の地方小都市における教会の進展を社会史的側面から明らかにしようとする大濱の方法論は、それまでの日本プロテスタント・キリスト教史研究が、ともすれば特定の神学思想史に偏る傾向があったことに対する批判であったともみてとれる<sup>11</sup>。社会史ないし社会科学的な視点を取り入れた日本キリスト教史研究者には他に隅谷三喜男<sup>12</sup>や先述のディサイプルス宣教師チャールズ・ガルストも研究した工藤英一<sup>13</sup>、鈴木範久<sup>14</sup>、また安中教会を題材に帝国史の視点も取り入れつつ分析し

たエミリー・アンダーソン<sup>15</sup>らがいる。

現代のキリスト教宣教史学は、キリスト教が伝えられた社会の既存文化を発展させることにキリスト教宣教や聖書翻訳が寄与したことや<sup>16</sup>、伝えた側である宣教師の思想や生活様式が宣教地の文化から影響を受けて変化していく様<sup>17</sup>、そして、宣教という文化交流を通してキリスト教信仰理解の幅が広がっていった点を分析する方向性が顕著に見られる<sup>18</sup>。つまり、現代のキリスト教宣教史は必ずしもキリスト教の信徒数増加や教会の進展のみを主要なテーマとするものではない。また、分析の枠組みとしても女性史<sup>19</sup>、脱西洋中心主義<sup>20</sup>、グローバル・ヒストリー<sup>21</sup>、あるいは教派の多様性を重視しつつ日本社会全体を俯瞰する視点<sup>22</sup>などがある。宣教の数量的成果に乏しい久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムであるが、こうした宣教史学の新しい方向性に寄与する余地はあると思われる。

本論では久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの全体像を詳述することはできないが、この活動の宣教史上の特徴を、現代宣教論における「ホリスティック」の概念を用いて明らかにしていきたい。以下では、まず「ホリスティック」概念を概説し、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの三地域における宣教活動を分析した上でその特質を検証していくこととする。

## 2. 現代宣教学における「ホリスティック」概念と久慈ヴァレー・エヴァンジェリズム

キリスト教福音派の宣教学においては、宣教のあるべき姿を問う過程においてホリスティックな宣教という概念が提唱されてきた。1974年のローザンヌ世界宣教会議で結ばれたローザンヌ誓約は、過去の福音派宣教論が「伝道と社会的責任とを互いに相容れないものとみなしてきたこと」の反省に立ち、「伝道と社会的政治的参与の両方が、ともに私たちキリスト者のつとめであることを確認」<sup>23</sup>した。換言すれば、個人の「魂の救い（救霊）」という福音派が従来から掲げてきた点だけでなく、社会問題解決のための取り組みもキリスト教「宣教」に含まれるとしたのであった。これは、神がもたらす福音は、目に見えない「霊」と目に見える「体」の両方に、つまり「全人的（ホリスティック[holistic]）」にかかわるという理解に基づいていた。こうして、宣教概念のみならず、宣教の中身であるキリスト教の福音理解自体の枠を広げたのが「全人的（ホリスティック [holistic]）」という概念であり、それがローザンヌ誓約の精神であった。

「ホリスティックな宣教（holistic mission）」という概念によって大きな転機を迎えた福音派の宣教論は、その後さらに発展している<sup>24</sup>。「ホリスティックな宣教」という概念には、「伝道」と「社会的責任」が並立して存在するように理解され得る余地があった。そこで、「伝道」と「社会的責任」の両者は不可分なものとして「統合」されていると考える立場から、「統合的宣教」（integral mission）という概念も登場した<sup>25</sup>。

その後、2010年に南アフリカのケープタウンで開催された第3回ローザンヌ世界宣教会議では、ローザンヌ誓約に始まり「統合的宣教」に至る精神を受け継ぎつつ、その後の時代変化によってもたらされた様々な社会問題を視野に据えた。具体的には、「世界的貧困、戦争、民族紛争、病気、生態学的危機、気候変動」さらには先端技術への対応、社会的分断、抑圧、偏見、資源の濫用、都市化、子どもが直面する様々な危機、権力者の横暴といった多くの課題が現代世界にあることが議論され、キリスト教宣教（伝道）とはそうした課

題への取り組みを含むものであることが確認されている<sup>26</sup>。

本論で扱うのはアメリカ合衆国に端を発する「キリストの教会」派の、主に大正期以降の日本におけるキリスト教宣教である。「キリストの教会」は、上述の福音派や、その前身である米国のプロテスタント・ファンダメンタリスト運動と直接的な歴史的つながりを持つわけではない<sup>27</sup>。また、1974年のローザンヌ誓約以後に見られるような宣教論に関する議論は、そもそも大正から昭和初期の多くのキリスト教宣教師、とりわけ「キリストの教会」の宣教師の意識の内にはなかったものである。それにもかかわらず、この時期の日本における「キリストの教会」宣教師の取り組みを検証するにあたって、伝道と社会的参与の両方を視野に入れた「ホリスティック」という宣教概念が有用となり得る理由がいくつかある。

そもそも、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムに携わった宣教師の多くは、20世紀米国の「キリストの教会」内にあって独自のアイデンティティを形成しつつあった、ケンタッキー州ルイビルに拠点をおく一連の指導者・信徒群の指導や支援によって来日していた（注：以下では、「キリストの教会」内の、この特定の集団を便宜的に「ルイビル・グループ」と呼ぶこととする。）<sup>28</sup>。「ルイビル・グループ」は、同時代に盛んな宣教活動を行っていた保守的なプロテスタント（後の福音派）の宣教師と多くの宣教観を共有していた。当時の保守的な宣教には、例えばハドソン・テラー（1832-1905）とその仲間である「チャイナ・インランド・ミッション（CIM）」の働きがある。他のプロテスタント主要教派が中国の大都市における教育という社会事業を通して宣教に携わっていた時代に、ハドソン・テラーは、むしろ中国内地の小さな村、とりわけキリスト教が伝えられていない土地に行き、中国農村部の生活様式を受け入れ、個々人の魂を救う「救霊」中心の宣教に専念することで宣教に関して西洋で多大な影響を及ぼしていた。この宣教活動の背景には、単純で素朴な聖書信仰に基づき、宣教がキリスト教徒の使命であると考えたテラーの宣教観があった。「ルイビル・グループ」にあって宣教を支援した人々や、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムに参加した宣教師たちも、その宣教理解は単純な聖書主義に基づくものであって、組織的・神学的な宣教理解を持っていたわけではなかった<sup>29</sup>。また、テラーと「キリストの教会」に直接的な結びつきがないにもかかわらず、「ルイビル・グループ」の指導者が宣教について触れる際にはテラーを一つの模範像として語られることがあった<sup>30</sup>。テラーを始めとする当時の保守的なプロテスタント宣教師は、キリストを信じないものは救われないとの救済観を持ち、キリストの再臨とキリスト教宣教の必要性を結びつけて考えていた<sup>31</sup>。「ルイビル・グループ」の宣教理解も、この点において共通していたのである<sup>32</sup>。

一方で、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムに携わった宣教師の思考様式や行動の背景には、米国の「キリストの教会」の伝統に根ざす二つの別の側面があった。そのうちの一つは、独特の人間観・教育観であった。1980年代終わり頃から多くの歴史学者が指摘してきたように、「キリストの教会」やその源流となったストーン＝キャンベル運動の思想的背景には、スコットランド常識学派の影響を受けた、聖書は平易な事実の集合体であって人間が普遍的に持つ「常識（コモン・センス）」を通して合理的に理解し得るものとの思想があった<sup>33</sup>。人間の理性の働きを重視するこの思考様式・人間観のもと、その理性を活

かす存在としてストーン＝キャンベル運動や「キリストの教会」内で盛んに設立されたのが、リベラル・アーツを基盤とした高等教育を始め、さまざまな教育機関であった。これは、同じ教育でも神学教育をまず教育の基盤に据えた他のプロテスタント諸派とは一線を画すものであった。ジェレミー・ヘギが指摘しているように、宣教を支援した「ルイビル・グループ」の背景にも、こうした合理的な聖書解釈理解とそうした合理性を養うための教育に対する強い信念があったのである<sup>34</sup>。

「キリストの教会」成立に深く関わり久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの宣教師たちが体現していたもう一つの特徴は、アメリカ合衆国の中でも特に南部で色濃かった独立気質であった。そもそも、米国南部の諸教会がストーン＝キャンベル運動のより大きなつながりから離脱して「キリストの教会」の群れを形成するに至った背景には、連邦政府といった中央集権組織への懐疑心や独立意識といった南部気質があったことが指摘されている<sup>35</sup>。久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムが、5人の宣教師家族の集合体であるにも関わらず、それぞれが設立した5つの教会は形式的にはあくまでも別個の教会として存在していたことにも、その影響がみてとれる。

つまり、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムに携わった宣教師の背景には、組織的な神学理解を伴わない単純・素朴な聖書主義によって得た宣教の必要性に対する確信、キリストを信じないものは救われないという当時の保守的なプロテスタント宣教論で支配的であった救済観、そして「キリストの教会」の伝統に根ざした人間観・教育観や独立気質が併存していたのである。その結果として実践されたのは、人々を信仰に導くという意味での伝道活動に加えて、以下に述べるような久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムに見られた様々な社会的活動であった。

### 3. 久慈ヴァレー・エヴァンジェリズム

久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムに携わったのは、1919（大正8）年1月に来日し1922（大正11）年2月に那珂郡塩田村長沢に教会を設立したO. D. ビックスラー夫妻（O. D. and Anna Bixler）、同じ年に遅れて来日して1923（大正12）年に常陸大宮で教会を設立したE. A. ローズ夫妻（E. A. and Bess Rhodes）、1919年の暮に来日し1923（大正12）年に福島県棚倉で教会を設立したハリー・ファックス夫妻（Harry R. and Pauline Fox）、1920（大正9）年に来日し1923（大正12）年に大子で教会を設立したハーマン・ファックス夫妻（Herman J. and Sarah Fox）、そして1925（大正14）年に来日し翌年太田町に教会を設立したB. D. モアヘッド夫妻（B. D. and Nellie Morehead）である。

このうち、最初に茨城に赴任したビックスラーが茨城を宣教地として選んだ理由について、後にビックスラーを知る人々の間で広まった一つの逸話がある。その逸話によれば、まだビックスラーが宣教師として来日する前のこと、米国の友人を前に日本地図を広げたビックスラーは、「東京は多くの宣教師が働くであろう。私は東京から離れた、いまだ福音の語られていない山村に働きたい」と述べ、東京の北のある場所を指差したという。その場所こそが実は茨城であったというのである<sup>36</sup>。たまたま地図上で指差した地であったから茨城に來たというのが創作であるにせよ、「いまだ福音の語られていない山村に働きたい」という願いは、中国の内地で宣教した先述のハドソン・テラーらの姿勢に共通す



るものがある。テラーもまた、イギリスにいた頃、書斎の壁に貼られた大きな地図で中国全域のことを毎日見ていたという<sup>37</sup>。実際に1921（大正10）年にビックスラーが米国の教会への宣教報告として記した文章によれば、ビックスラーが長沢の地を選んだ理由は二つあった。一つは、そこで既に伝道活動が行われてきたことであり、二つ目は、そこが人口200人足らずの小さな村で日本の田舎（農村部）の只中であること、しかも、他の宣教師がいない場所であることであった<sup>38</sup>。

ビックスラーの記した、既に行われていた茨城での伝道活動とは、茨城出身の日本人牧師平塚勇之助の伝道であった。1903（明治36）年に米国留学から帰国して東京の上富坂基督教会で牧師となった平塚は、1909（明治42）年8月29日から茨城地方に伝道旅行に出かけている。その際、故郷の那珂郡塩田村長沢を訪れ、近くの川において、65歳になっていた実母せんをはじめとする親族4名に洗礼を授けている。また、1913（大正2）年には塩田村に隣接する大賀村にも伝道旅行し3名に洗礼を授けている<sup>39</sup>。

そのころ、上富坂教会の宣教師であったウィリアム・ビショップが病気のために1913（大正2）年1月に米国に帰国し4月に米国で死去している。代わって上富坂教会で奉仕することになったのが米国人宣教師のC. G. ヴィンセント（1911年10月来日）であった。平塚が1915（大正4）年3月に再び故郷茨城への伝道旅行に出かけた際には、ヴィンセントが同行している。平塚にとって初めて伝道旅行を共にした宣教師がヴィンセントであり、このヴィンセントは、初めて茨城伝道をした「キリストの教会」米国人宣教師となった<sup>40</sup>。これは水郡線（当時は水戸鉄道）が1918（大正7）年10月に常陸大宮まで開通する前であり、上野から水戸まで汽車で行った二人は、さらに人力車と乗合馬車を乗り継いで常陸大宮に到着している。

平塚の記録によれば、ヴィンセントを伴ったこの伝道旅行は大盛況で、計4箇所では伝道集会を開催し、計1,000名以上の参加者があり、聖書30-40冊及びキリスト教伝道トラクト約1,500枚を配布した。最初に訪れた那珂郡大賀村では、役場前にあった有力者の邸宅を会場にキリスト教伝道集会が開かれ、村長、公吏をはじめ大人200名、子ども100名程が集まったという。この際、幻灯機を用いたイエス・キリストの生涯についての映画を上映するとともに、ヴィンセントが英語で説教し平塚が通訳している。次の山方村でも幻灯機を用いたキリスト教伝道集会を開催し、村長をはじめ村の高等尋常小学校校長、平塚の親族を含め総勢300名程が参加した。さらに、4月1日の同小学校入学式後には請われてヴィンセントが「米国の家庭教育」をテーマに講演している。同日夜には平塚の郷里の塩田村長沢に着き、既に1911（明治44）年に上富坂教会で洗礼を受けていた勇之助の甥である平塚真の家を会場とした集会に130名程が集まったという。その翌日には、数名と個別にキリスト教の話をする機会があり、真の弟（勇之助の甥）である平塚隆がヴィンセントから洗礼を授かっている。さらに塩田村北塩子でも、小学校長を含む300名が参加するキリスト教伝道集会を開かれたのであった<sup>41</sup>。

平塚の茨城伝道に端を発して始まった久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムは、上記のような地道な伝道活動の他に、以下のような社会的な活動を伴うものであった。

#### A. ビックスラーと食品製造販売事業

1922（大正11）年、ビックスラーは長沢村に米国より取り寄せた組み立て式の住居を、日本人土工の手により、ビックスラーが英語の説明書を翻訳しつつ建て上げ完成させた。この住居を記憶する日本人信者の一人は、「山を背にして樹間に見える洋館は山里には珍しい眺望」<sup>42</sup>であったと後に記している。ビックスラー自身は、この家が周囲の日本家屋と異なっていることを少しも恥じておらず、むしろその家の見た目の特異性の故に朝から晩まで多くの見物人が（休日には200人近く）やってくることを宣教上の利点とみなしていた<sup>43</sup>。また、妻アンナが作る食事、クッキー、アイスクリームで訪れる人をもてなした<sup>44</sup>。土地の人々も、ビックスラーの家を西洋館と呼び、家の前の坂をキリスト坂と呼んで親しみを覚えたという<sup>45</sup>。こうしたビックスラーの生活様式は、中国農村の生活に自らが合わせるというテラーの宣教姿勢と異なるものであった。

また、長沢に居を構えて数年のうちに、ビックスラーは収入源の一つとして食品製造販売を開始している。やがて自宅地下で製粉作業を開始し<sup>46</sup>、1930（昭和5）年にはヘルス・フーズ・インダストリーとして事業を開始した。教会堂に隣接した工場を建設し、事業の経営は日本人信徒の平塚真があたった<sup>47</sup>。こうした食品製造販売事業は、経済的自立心に溢れていたビックスラーが、米国からの送金だけでは足りない宣教費用や日本人伝道者の給料を自らの手で得ることを目的としていた。

やがて製造する食品の種類も増し、サトウキビから糖蜜（molasses）を製造したり<sup>48</sup>、小麦パフ（シリアル）やコーンフレーク、オートミール等を製造して販売する事業は、主に外国人向けに東京や軽井沢での販路を広げたことで佳境に入った<sup>49</sup>。1933（昭和8）年には東京の三越デパートで開催された茨城県主催の物産宣伝会にも出品している<sup>50</sup>。こうした事業は、ビックスラーが1935（昭和10）年に常陸太田に移り、1938（昭和13）年に帰国するまで続けられたのであった<sup>51</sup>。

#### B. ローズと幼稚園

ローズは、ビックスラーが塩田村長沢に居宅を建設する以前から、長沢にほど近い常陸大宮に宣教拠点を構えることを検討していた<sup>52</sup>。そして、ビックスラーの誘いに加え、常陸大宮に熱心な日本人信者がいたこともあってローズは1923（大正12）年から常陸大宮に拠点を構えて宣教活動を開始している<sup>53</sup>。

1925（大正14）年9月、ローズは自宅の一部を開放して幼稚園を開設した。1929（昭和4）年に近接地に教会堂を建設した際には、そこに幼稚園も移転している（現在の大宮聖愛保育園）<sup>54</sup>。幼稚園で教えたのは、ローズの妻に加えて常陸大宮教会の日本人女性会員であった<sup>55</sup>。

ローズが幼稚園を開設した理由は資料的に明らかにされていない。もっとも、キリスト教宣教に付随して幼児教育が行われることは当時珍しくなかった。また、妻のベス・ローズの思いが幼稚園開設の背景にあったことが推察される。彼女は、若き日に「実に危険な年々」を過ごしていた自分が身を正すきっかけとなったのは、ある時思い出した、幼児期

に母から受けた聖書の教えであったという<sup>56</sup>。

### C. モアヘッドと幼稚園、キングバイブルスクール

1925（大正14）年に来日したモアヘッドの宣教手段の特徴は、米国での自身の学びや教会生活の体験を元にしたものであった。特に重視したのは文書配布であり、米国から送られた新約聖書、ルカによる福音書分冊、トラクト等を配布した<sup>57</sup>。

太田町ではまた、モアヘッドの妻ネリーによって幼稚園が設立されている。米国の教会の日曜学校や孤児院で子どもに聖書を教えるなどの経験があったネリーは、常陸大宮のベス・ローズが幼稚園を始めたことにも影響されて太田の地に幼稚園を開設したという<sup>58</sup>。ネリーと二人の日本人キリスト者が町を歩いて宣伝した結果、幼稚園開園初日には60名の園児が集まったという。ネリーの他に20代の二人の女性教師がおり<sup>59</sup>、日常的に聖書の話をし、讃美歌を歌うのが幼稚園の日課であった。また、毎週金曜日には園児の母親を始め、町長など近隣の人々が招かれた。そして、園児が人々の前で聖書物語を読み、讃美歌を歌うのに耳を傾けたという。3年間という短い開園期間の間に約300人の園児が通園した<sup>60</sup>。

久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの他の宣教師同様、1925（大正14）年に来日したモアヘッドもアメリカ式の生活様式を維持した。家も洋風で、居間には暖炉があり、窓の外にはプランターの花が飾られたという。妻のネリーは米国リプスコム大学のピアノ科を卒業しており、米国から移送したピアノを家で弾いたという。食に関してもアメリカ式であった。米、じゃがいも、果物のいくつかは日本で購入したものの、日本食が口に合わなかったネリーは、肉、果物、野菜、豆類、無糖練乳等の缶詰をはじめ、食料を米国から取り寄せた<sup>61</sup>。

太田町におけるモアヘッドの最大の事業は、日本人牧師養成のための学校設立であった。このために、1928（昭和3）年5月から1929年1月にかけて渡米し、資金集めをしている。それは、いくつかの例外を除き、特定の資産家だけでも、宣教団体でもなく、同じ群れの教会をくまなく回って資金を集める、典型的な「キリストの教会」式の資金集めであった。妻のネリーも500ドルを諸教会の女性グループから、幼稚園のための500ドルを事業家のジョージ・ペパダインから集めている。モアヘッド自身も100ほどの教会を訪問し、教会堂や自宅、職員住居、学校のために計約3,000ドルの資金を集めたという<sup>62</sup>。1929（昭和4）年10月にアメリカ合衆国の株価が大暴落し世界恐慌となったことを鑑みると、モアヘッドが資金集めをしたのは豊富な資金が得られる好機であった。

モアヘッドが建てたのは、学校の建物（2階建てで、教室が一つ、寮として用いられた2名用の寝室3室、食堂が含まれていた）、モアヘッド自身の家（宣教師館）、日本人伝道者の家（牧師館）、そして教会堂であった。6人の男子学生がここで午前中学び、午後は食料品製造販売に従事し、夜には聖書やトラクト配布等の伝道活動が日課となっていた。このキング・バイブル・スクールでは、多いときで12～13人程が学んでいたと繁國良八は記憶している<sup>63</sup>。

学校の学費と寮費は無償であった。後にこの学校を引き継いだハリー・ファックスは、無料であった理由として神の備えがあるからであると記しているが<sup>64</sup>、実際の経済的支援



に役立ったのは、アメリカ式の食事を好んだモアヘッドの食品製造販売事業であった。モアヘッドは、ロシアから輸入した小麦を、アメリカから取り寄せた手動製粉機などを用いて小麦粉、全粒粉、シリアル等として製品化し、日本にいる宣教師に販売した。このために日本中にいる800人もの外国人宣教師の名前と住所のリストを持っていたという。やがて、鶏肉、野菜、果物の缶詰にも生産を広げていった<sup>65</sup>。

1930（昭和5）年のモアヘッド帰国以後は、ハリー・ファックスが棚倉から転居して太田の事業を引き継いでいる。1935年にはそのファックスも帰国し、ビックスラーが長沢から転居して、事業を引き継いでいる。1938年にビックスラーが帰国したのちは日本人牧師の繁國良八がこの事業を引き継いでいるが、1940年頃には主な事情を閉鎖するに至った<sup>66</sup>。

#### D. 久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの評価

久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムは、宣教活動の成果が高く評価されているわけではない。1925年に中国に赴任する途中に日本に立ち寄った米国「キリストの教会」宣教師のジョージ・ベンソンは、茨城・福島のビックスラー、ローズ、ハーマン・ファックス、ハリー・ファックスを訪問し、それらの教会に集う人数が極めて少なかったことに失望したと記している<sup>67</sup>。20世紀前半の日本における他教派の宣教に比べても、当時設立された教会が現在に至るまで存続しているか否かという観点からすれば、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの宣教成果は乏しいといえる。実際に、現在の米国の「キリストの教会」における宣教論的議論においても、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの伝道的側面の評価は低いものである<sup>68</sup>。

もっとも、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの活動には別の側面もあった。大正・昭和期の日本において、宣教師自身の意図はキリスト教伝道であったにせよ、福島や茨城の地方小都市や農村部に米国人が5家族も移住し、幼稚園や食品製造などを通して近隣住民と交流したこと自体も、副次的とはいえ久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの貴重な遺産と言える。

ビックスラーの食品製造販売事業も、宣教を支援した米国の信徒からは評価されなかったものの、周囲の人々の視点は違っていた。そもそも、異国で宣教している仲間の米国人宣教師とその家族にとってみれば、食糧不足の状況にあってビックスラーの事業は貴重な栄養源をもたらすものであった<sup>69</sup>。さらに、周囲の日本人も同様の思いをもっていた。1929（昭和4）年に大宮教会で受洗して以来常陸大宮教会で働きビックスラーを良く知っていた日本人信者は、ビックスラーの食品製造に対する評価として、「教会堂の隣に製粉やその他の食品工場を開いたり、乳牛を飼われたりなさった事で村人に新知識を与えられ又、親しみを増された」と記している<sup>70</sup>。そもそも、医師を父に持ち、自らもかつて医学の道を志したことがあるビックスラーは、日本の山村に住む人々に栄養改善が必要であることを念頭に入れていたのである<sup>71</sup>。

#### 4. おわりに

「宣教（伝道）とは救霊である」と理解していたテラーや当時の保守的な宣教師の多くは、宣教において「魂の救い（救霊）を目的とする伝道」と教育をはじめとする社会的活動を合わせて行うことはなかった。一方、同じように個々人の魂を救う「救霊」を主眼としたはずの久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの宣教師は、伝道と共に食品製造販売や幼稚園教育に積極的に携わった。幼稚園設立の背景には、宣教師自身の意図はどうあれ、「キリストの教会」に伝統的に見られる理性主義や人間観があったと理解することができる。また、食料製造販売も「キリストの教会」のエートスの一つである独立意識、特に経済的自立意識がその根底にあったと解釈できるものである。こうしてみると、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムは、保守的な宣教理解に基づく伝道と、人間主義的・実利的な必要に基づく社会的な活動が、異なる意図のもとに偶然重なったものと見ることもできる。

ホリスティックな宣教とは、伝道と社会的責務・活動の両方を見据える宣教概念である。久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムで行われた宣教は、宣教論を吟味した結果の到達点としてのホリスティックな宣教活動とは言えない。また、人々をキリスト教信仰に導こうという伝道活動と食品製造販売などの社会活動は意図的に一つの宣教活動として統合されていたわけでは無論ない。しかし、結果的に伝道と社会活動が併存していたという意味では、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの活動を、意図せざるホリスティック宣教の先駆けととらえることも可能であろう。

本稿では、久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの全体像は明らかにできていない。今後の課題は、本稿では十分に言及できなかったが他にも数多く存在する「キリストの教会」関連の日本語・英語の資料を用いて分析を進めることである。さらには、茨城だけでなく他の地方小都市や農村部における宣教活動に関する研究と比較することで、日本の地方におけるキリスト教宣教史の解明が進展するであろう。

#### 付録：久慈ヴァレー・エヴァンジェリズム関連年表

1909（明治42）年	東京・上富坂基督教会牧師の平塚勇之助が故郷・茨城県塩田村で個人伝道開始
1915（大正4）年	平塚勇之助、C. G. ヴィンセント宣教師を伴い茨城伝道旅行
1918（大正7）年	水戸鉄道（現・水郡線）が常陸大宮まで開通
1919（大正8）年	O. D. ビックスラー夫妻（O. D. and Anna Bixler）来日
同年	E. A. ローズ夫妻（E. A. and Bess Rhodes）来日
同年	ハリー・ファックス夫妻来（Harry R. and Pauline Fox）来日
1920（大正9）年	ハーマン・ファックス夫妻（Herman J. and Sarah Fox）来日 米国ルイビよりD. C. ジェーンズ訪日
1922（大正11）年2月	長沢教会設立（ビックスラー夫妻） 福澤春子（後に繁國良八と結婚）、ビックスラー夫妻と共に働く
同年12月	大郡線（現・水郡線）常陸大宮―山方宿開通

1923 (大正12) 年	常陸大宮 (ローズ夫妻), 大子 (ハーマン・ファックス夫妻), 棚倉教会 (ハリー・ファックス夫妻) 設立
1925 (大正14) 年	B. D. モアヘッド夫妻 (B. D. and Nellie Morehead) 来日 ローズ夫妻が大宮に幼稚園開設
1926 (大正15) 年	太田教会設立
1927 (昭和2) 年	繁國良八米国より帰国 大郡線 (現・水郡線) が大子まで開通
1928 (昭和3) 年	米国の事業家ジョージ・ペパダイン訪日
1929 (昭和4) 年	太田町にキングバイブルスクール設立
1930 (昭和5) 年	ビックスラーが長沢にヘルス・フーズ・インダストリー設立
同年5月	繁國良八太田へ
同年11月	モアヘッド夫妻帰国, ハリー・ファックス夫妻太田へ
1932 (昭和7) 年	水郡南線 (現・水郡線) が磐城棚倉まで開通
1935 (昭和10) 年	ハリー・ファックス夫妻帰国, ビックスラー夫妻太田へ ローズ夫妻横浜へ 堀口澄明・英夫妻, 大宮教会に着任
1938 (昭和13) 年	ビックスラー夫妻帰国
1939 (昭和14) 年	ローズ夫妻帰国
1941 (昭和16) 年	ハーマン・ファックス夫妻帰国
1941-1945年	太平洋戦争
1947 (昭和22) 年	日立市多賀町にシオン学園 (夜間英語学校・幼稚園) 創立

- 1 この運動を起源に持つのが「ディサイプルス派」(Disciples of Christ), 「キリストの教会 (有楽器派)」(Christian Churches and Churches of Christ), そして本論でとりあげる「キリストの教会」(Churches of Christ) である。ストーン＝キャンベル運動については以下を参照: Foster, Douglas A. Foster, et al., eds., *The Encyclopedia of the Stone-Campbell Movement* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2004); Newell D. Williams, Douglas A. Foster, and Paul M. Blowers, *The Stone-Campbell Movement: A Global History* (St Louis, MO: Chalice Press, 2013).
- 2 『遙かなる羊の群れ: 常陸太田キリストの教会80年誌』常陸太田キリストの教会, 2005年, 4頁参照。
- 3 茨城キリスト教学園の正史における久慈ヴァレー・エヴァンジェリズムの位置づけに関しては, 『シオンの丘五十年: 茨城キリスト教学園高等学校五十年・中学校三十五年誌』茨城キリスト教学園高等学校, 1997年, 23-25頁; 茨城キリスト教学園60年誌編纂委員会編『茨城キリスト教学園60年誌図録』茨城キリスト教学園, 2010年, 5-8頁参照。
- 4 大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館, 1979年, 111-183頁。この書の巻末には全国の各教会教会史一覧がまとめられている。
- 5 例えば, 森岡清美・新保満編著『地方小都市におけるキリスト教会の形成: 上州安中教会の構造分析』日本基督教団宣教研究所, 1959年; 『安中教会史: 創立から100年まで』新島学園新島文化研究所, 1988年; 久保千一『柏木義門研究序説: 上毛のキリスト教精神史』日本経済評論社, 1998年; 山下智子編著『群馬のキリスト者たち』聖公会出版, 2012年。
- 6 青木敬和「茨城県」『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988年, 129頁。
- 7 「明治期水戸市におけるキリスト教会とその活動—その一—」(茨城の近代を考える会)『茨城近代史研究』創刊号, 1986年1月, 58-66頁。

- 8 チャールズ・ガルストについては以下を参照：L. D. ガルスト『チャールズ・E. ガルスト：ミカドの国のアメリカ陸軍士官学校卒業生』小貫山信夫訳，聖学院大学出版会，2003年。
- 9 秋山操編著『基督教会（ディサイプル）史』基督教会史刊行委員会，1973年，478-479頁。「キリストの教会」の日本人伝道者（牧師）繁國良八が1920年代後半に太田町に行った際，閉鎖されたディサイプルス派太田町教会の信者数名に出会い，太田町のキリスト教布教を委ねられたと繁國は語っている。「対談：ビックスラー先生と繁國先生」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』御茶の水キリストの教会，1985年，136頁。
- 10 『基督教会（ディサイプル）史』，480頁。
- 11 『明治キリスト教会史の研究』，111-183頁。
- 12 『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社，1950年。
- 13 例えば『日本キリスト教社会経済史研究』新教出版社，1980年。ガルスト研究は『単税太郎C・E・ガルスト：明治期社会運動の先駆者』聖学院大学出版会，1996年。
- 14 『日本キリスト教史：年表で読む』日本キリスト教書販売，2017年。
- 15 Emily Anderson, *Christianity and Imperialism in Modern Japan: Empire for God* (London: Bloomsbury, 2014).
- 16 Lamin O. Sanneh, *Translating the Message: The Missionary Impact on Culture* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 2009).
- 17 例えば，Daniel H. Bays and Grant Wacker, *The Foreign Missionary Enterprise at Home : Explorations in North American Cultural History* (Tuscaloosa, AL: University of Alabama, 2003)を参照。
- 18 こうした視点に先鞭をつけた新古典とも言える著作にAndrew F. Walls, *The Missionary Movement in Christian History: Studies in the Transmission of Faith* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1996); Andrew F. Walls, *The Cross-cultural Process in Christian History: Studies in the Transmission and Appropriation of Faith* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 2002)がある。
- 19 例えば，Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice* (Macon, GA: Mercer University Press, 1996)を参照。
- 20 例えば，Dale T. Irvin and Scott W. Sunquist, *History of the World Christian Movement*, Vol. I and II (Maryknoll, NY: Orbis Books, 2009, 2012)を参照。
- 21 例えば，ミラ・ゾンターク編『＜グローバル・ヒストリー＞の中のキリスト教：近代アジアの出版メディアとネットワーク形成』工藤万里江・平田貴子訳，新教出版社，2019年を参照。
- 22 黒川知文『日本史におけるキリスト教宣教：宣教活動と人物を中心に』教文館，2014年。
- 23 <https://lausanne.org/ja/content-library-jp/covenant-ja/covenant-ja>（最終閲覧：2022年9月25日）。
- 24 宣教学における「ホリスティック概念」やその議論の変遷については以下を参照：René Padilla, “Holistic Mission” in *Lausanne Occasional Paper* 33, 2004. <https://lausanne.org/content/holistic-mission-lop-33#wihm>（最終閲覧：2022年9月25日）；Ch.2 of Monty Lynn, Rob Gailey, and Derran Reese, *Development in Mission: A Guide for Transforming Global Poverty and Ourselves* (Abilene, TX: Abilene Christian University Press, 2021); Hannes Wiher, *Holistic Mission: An Historical and Theological Study of Its Development, 1966-2011* (Eugene, OR: Wipf & Stock, 2022).
- 25 クリス・ライト「第2章 宣教についての考察」，ジョン・ストット，クリストファー・ライト『今日におけるキリスト者の宣教』立木信恵訳，いのちのことば社，2016年，48-88頁。
- 26 『ケープタウン決意表明（コミットメント）』日本ローザンヌ委員会訳，いのちのことば社，2012年，9，49-85頁。
- 27 米国における福音派の複雑な歴史は，以下の書で詳しく解説されている：青木保憲『アメリカ福音派の歴史：聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』明石書房，2012年。
- 28 本論で扱う宣教師のうち，ビックスラー夫妻，ローズ夫妻，ハリー・ファックス夫妻，ハーマン・ファックス夫妻，つまりモアヘッド宣教師夫妻以外の全てが「ルイビル・グループ」を経由して来日し，少なくとも活動の初期はこのグループを通して主な経済的・精神的支援を受けていた。
- 29 C. Philip Slate, *Lest We Forget: Mini-Biographies of Missionaries from a Bygone Generation* (Winona, MS: J. C. Choate Publications, 2010), 110.
- 30 例えば，「ルイビル・グループ」指導者の一人の書でハドソン・テラーに言及されている：E. L. Jorgenson, ed. *Faith of Our Fathers* (Louisville, Ky.: Word and Work, 1953).

- 31 『ハドソン・テラー』, 128, 156-157, 164頁; Klaus Fiedler, *The Story of Faith Missions: From Hudson Tayler to Present Day Africa* (Oxford: Regnum Books International, 1994), 32-34. 同時期の保守的キリスト教宣教師理解については以下を参照: Timothy P. Weber, *Living in the Shadow of the Second Coming*, 2d ed. (Grand Rapids: Zondervan, 1983), 67.
- 32 キリストの再臨に関する理解と「ルイビル・グループ」の宣教論の関連については、例えば以下を参照: Yukikazu Obata, “The Apocalyptic Origins of a Church of Christ Missionary: O D Bixler's Early Years in the United States (1896-1918),” *Discipliana* 58 no. 1 (1998), 22-32.
- 33 例えば以下を参照: C. レナード・アレン, リチャード・T・ヒューズ『わたしたちのルーツ』池田基宣他訳, 大阪聖書学院, 2019年, 第7章。
- 34 Jeremy Hegi, “One-Man Missionary Society: The Indefatigable Work of Don Carlos Janes,” *Restoration Quarterly* 58 no. 4 (2016), 216.
- 35 David Edwin Harrell, Jr., *The Social Sources of Division in the Disciples of Christ, 1865-1900* (Atlanta: Publishing Systems, 1973).
- 36 「あしあと」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 1-2頁。
- 37 ハドソン・テラー『ハドソン・テラー, 信仰の生涯を語る』いのちのことば社印刷部訳, いのちのことば社, 1991年, 153頁。
- 38 O. D. Bixler, “Shioda Mura Jotting,” *Missionary Messenger [Tokyo]* (October 1921), 4.
- 39 「上富坂教会日誌」1909年8月29日, 1913年3月26日; 『神によりてやすし: 平塚勇之助自伝』平塚敬一編, ヨルダン社, 1989年, 142, 158-159頁。
- 40 「上富坂教会日誌」1915年3月29日, 『神によりてやすし』, 171頁。
- 41 「上富坂教会日誌」1915年3月29日, 『神によりてやすし』, 173-175頁。
- 42 後藤良一「お若いころの先生」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 24頁。
- 43 Bixler, “That Long Looked for Location,” *Missionary Messenger [Tokyo]* (June 1922), 3.
- 44 平塚まさ「ビックスラー先生の思い出」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 26頁; 平塚節子「ビックスラー先生をしのびて」同書所収, 46頁。
- 45 平塚節子「ビックスラー先生をしのびて」, 46頁。
- 46 英字新聞 *Japan Times & Mail* (後の *Japan Times*) 1925年1月26日付紙面4頁, 1928年2月2日付紙面3頁には, ビックスラーが“Mission Brand”のブランド名で製造したベーキング・パウダーが東京芝区の食料品輸入商社で購入できるとの広告が掲載されている。
- 47 「あしあと」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 4頁。
- 48 O. D. Bixler, “News from Ibaraki Province,” *Oriental Christian* (November 1933), 10.
- 49 鈴木三之「ヘルスフードインダストリー」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 59頁。
- 50 平塚まさ「ビックスラー先生の思い出」, 26頁。
- 51 E. A. Rhodes, “Tribute to O. D. Bixler”『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 170頁。
- 52 Bixler, “Shioda Mura Jotting,” 4.
- 53 E. A. Rhodes, “The Work At Hitachi Omiya,” *Missionary Messenger [Tokyo]* (May/June 1923), 2.
- 54 繁國良明「大宮聖愛保育園」『キリストの教会史 (茨城以北版)』239頁。
- 55 E. A. Rhodes, “Omiya Work,” *Missionary Messenger [Louisville]* (May 1943), 1449.
- 56 ベス・ローズ「母の感化」『道しるべ』第1号 (1928), 12-13頁。
- 57 George P. Gurganus and Dan G. Garringer, *A Man with World Vision: A Biography of Barney Dallas Morehead and Nellie Hertzka Morehead* (Winona, MS: J. C. Choate Publications, 1978), 24-25.
- 58 *Man with World Vision*, 14, 27.
- 59 *Man with World Vision*, 27.
- 60 *Man with World Vision*, 28.
- 61 *Man with World Vision*, 14, 28.
- 62 *Man with World Vision*, 31. キング・バイブル・スクールという名称から, ロバート・S・キングという個人が主要な資金提供者であったように記されている場合があるが, それは正しくない。「久慈川沿いの活動」『キリストの教会史 (茨城以北版)』, 23頁。
- 63 「対談: ビックスラー先生と繁國先生」『オー・デー・ビックスラー先生をしのぶ』, 137頁。
- 64 ハリー・ファックス「聖書学校について」『道しるべ』(1930年12月), 16頁。



- 65 *Man with World Vision*, 32.
- 66 「久慈川沿いの活動」『キリストの教会史（茨城以北版）』, 23頁。
- 67 L. Edward Hicks, George S. Benson, and Memphis State University Oral History Research Office, “The Mission Work of George S. Benson in China and the Philippines: 1925-1936: An Interviews with Dr. George S. Benson, April 15, 1987-April 28, 1987,” Memphis, TN, 1989), 145-146.
- 68 Slate, *Lest We Forget*, 111.
- 69 E. A. Rhodes, “Tribute to O. D. Bixler”, 170頁。
- 70 後藤良一「お若いころの先生」, 24頁。
- 71 Obata, “The Apocalyptic Origins,” 22-32.

# Kuji Valley Evangelism: The Emergence of Holistic Mission in Ibaraki, Japan during the Taisho and Early Showa Period

Yukikazu OBATA, Shinichiro KUMAZAKI

During the years 1922 through 1941, or the late Taisho and early Showa periods in pre-WWII Japan, five American Christian missionaries and their families established churches in five rural areas of northern Ibaraki prefecture and southern Fukushima prefecture. Although each of the five churches and their work was distinct, those churches were located close enough, so that the five missionaries regularly helped one another. Eventually, the missionaries referred to their collective efforts as “Kuji valley evangelism,” named after the Kuji river that ran nearby. Besides evangelism, the missionaries associated with Kuji valley evangelism engaged with such social endeavors as kindergartens, a Bible school, and health food productions and sales. The numerical result of their mission efforts was minimal, but such endeavors as food sales, originally begun as a means to self-support their mission work, were appreciated by Americans in Japan, as well as local Japanese people. We investigate the various efforts of Kuji valley evangelism through the notion of “holistic mission” to argue that their work, consisting of both evangelism and social responsibility, could be interpreted as an unintended forerunner of what came to be known as holistic mission.